



開校記念日に寄せて「梅豆羅（めずら）の里」

明治40年（1907年）に町立唐津実科高等女学校として創立されて以来、「朝（あした）に希望夕べに感謝」の建学の精神のもと、幾多の変遷を経ながら昭和31年（1956年）に唐津西高等学校として出発し、本年度で114年の歴史を積み重ねてきた、長い歴史と伝統を誇り、令和という新しい時代に新たな歴史を作り上げ、多様な進路先の実現を目指している学校です。卒業生の数は2万人を超え、地元唐津市及び佐賀県はもとより、国内外の各分野で活躍されています。

ところで、現在の校章「双松」の由来の概要は、以下のとおりです。本校は、昭和54年（1971年）に現在に移転するまでは、坊主町にありました。（現在の早稲田佐賀高校の寮）その校舎の正面玄関の両側に品格のある松が雄姿を誇っていたそうです。昭和31年当時の数名の若い先生方が、校章は“松をデザインし、全体的に「W」をイメージするものにしたらどうか”提案され、完成したそうです。「W」はもちろん西高のWestの他、情報伝達に不可欠な要素 When（いつ）/Where（どこ）/Who（誰が）/What（何を）/Why（なぜ）/How（どのように）の6つの「W」が意図的に配慮されています。二本の松には、「師弟同行」が協力し合う姿を表現し、Withの「W」でつないでいます。また、松の葉の数は7葉ずつになっており、ラッキー・セブンの幸運、先端の新芽には、若者の未来の洋々たる前途を表しています。

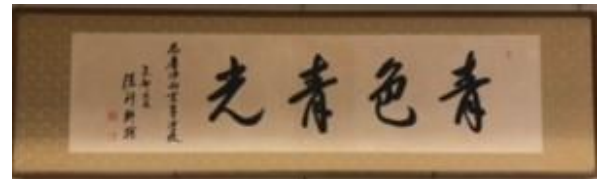
また、本校には、伝統校にふさわしく校訓がない代わりに色々な言葉が伝承されています。「朝（あした）に希望夕（ゆう）べに感謝」（唐津高等女学校の合言葉）「双松の誓い」（生活信条；西高分離独立時（S33?）制定、岩田武男先生提唱（元唐津商業高校長））「師弟同行」などです。

そして、本校の校歌は、昭和32年に制定発表されました。作詞者の三根寿太先生（元唐津中学校・唐津東高校教師）は、一番の歌詞に「懐かしい伝説、栄えある歴史に培われて勉強に勤しむ希望に燃ゆる学徒の静的方面をあらわしたつもりであります。」と思いを寄せて作詞したと本校50周年誌に寄稿されています。その校歌の1番の最初に「梅豆羅（めずら）の里の歴史（ふみ）の跡」とあります。

「梅豆羅の里」の語源は、「古事記」（712年）「日本書紀」（720年）のいずれにも神功皇后（じんぐうこうごう）が肥前国松浦県（まつうらのあがた、佐賀県）にいき、玉島里の小川のほとりで食事を取りました。その際、皇后は川の中の石にのぼって魚釣りし、竿をあげると年魚（鮎）がかかっていた。皇后は「めずらしい魚だ」と言い、皇后はその地を梅豆羅国（めずらのくに）と名付けたそうです。そして、現在の松浦は「めずら」がなまったものと言われています。

本校の校長室にも「梅豆羅なもの」があります。中島潔画伯（本校6回卒業）の絵画や原画他、多数の書・絵画・彫刻などです。その中で「青色青光（しょうしき しょうこう）」（保利耕輔（元衆議院議員、文部、自治大臣、唐津市出身））の書があります。

この言葉は、「阿弥陀経」という御經典の中に、「青色青光黄色黄光赤色赤光白色白光」（しょうしきしょうこう おうしきおうこう しゃくしきしゃっこう びやくしきびゃっこう）という一文の一部です。色とりどりの花々が咲いており、どの花も光り輝いている。青色の花は青い光、黄色い花は黄の光、どれも優劣なく美しい。つまり、皆それぞれに役目がある。詩人金子みすゞの「みんなちがってみんないい」やアナと雪の女王の「ありの～ままで～」と同意義の言葉です。ダイバーシティという言葉に代表されるように、個性や多様性の尊重を二千年以上昔に説かれた仏さまの教えの中に、これから私たちが進むべき方向が示されていると思います。



朝、今日も頑張るぞという気持ちで希望を持ち、「明るい挨拶 気持ちの良い挨拶」で始まり、「師弟同行」の気持ちで学び合い、夕にすべての人に感謝すれば、皆さん一人ひとりの目標が達成でき、充実した高校生活が過ごせます。この114年目も日本はもちろん世界が見えない敵「ウィルス」と戦っています。感染症対策をいわゆる3密とマスクの着用及び手洗い・手指消毒の徹底し、健康に留意し、責任ある行動を心掛け、「Action & Reflection」できる有意義な一年となることを祈念し、開校記念日の挨拶とします。

令和3年4月30日

佐賀県立唐津西高等学校長 吉山 耕一郎